



公正な態度で

うわさや信じて、おだちをきかずつづけてしまったことはないかな。



森川君のうわさ



「上手だね、この本立て。」

「わたし、森川君を見直しちゃった。」

「二スまでぬってあるんだね。」

「作品展が終わったら、わたしに出来ないかしら。」

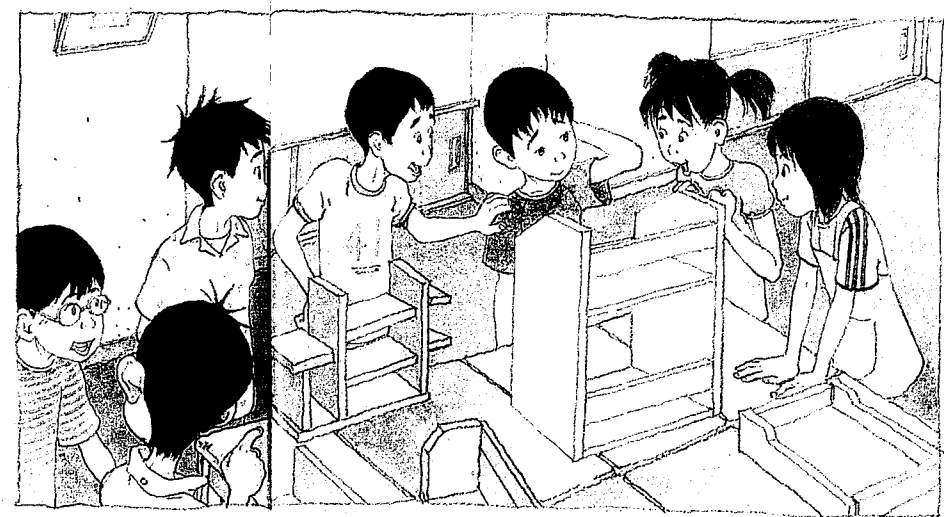
夏休みの作品展のときのことだ。みんなは、森川君が作った本立ての前で、森川君を口々にほめた。工作が苦

手なぼくは、森川君がうらやましかった。

森川君は、ほめられてうれしそうだった。

作品展があった二、三日後、ぼくは、学校の帰りに、

石山君たちといっしょになった。



「森川君の作った本立てを覚えているかい。」

「うん、上手だったね。」

「あれは、本当は、森川君のお父さんが作ったんだって。」

「本当？ そういえば、森川君のお父さんは大工さんだったよね。」

*ふんがい
ひどく腹を立てること。

石山君たちがふんがいして話すのを聞きながら、ぼくは変だなと思った。以前、ぼくは森川君の家へわすれ物をとどけたことがあった。森川君は、犬小屋にペンキをぬって

いて、

「けっこう上手だろ。これ、ぼくが最初から一人で作ったんだよ。」

と、得意そうだった。そのとき、ぼくは、森川君は器用なんだなと思ったのだ。だから、「それはちがう。」と言おうと思った。でも、言い争いになったらめんどろうと思ったので、

だまっていた。
「森川君の本立ては、家の人が手伝ったものだ。」といううわさは、やがてクラス中に広がってしまった。しかし、みんなの関心は、近づいてきた運動会に向いていき、そのうわさは、いつの間にかわすれられていった。

そのまま何も起きなければよかったのだけれど……。

三学期になって、ぼくたちは卒業記念のオルゴールを作り始めた。図工の時間だけでは間に合わず、

家でやってくることになった。

次の週の図工の時間、みんなは、森川君のオルゴールのふたのちようこのできばえに感心した。細かい花模様で、ほり方も上手で、まるでデパートで売っているオルゴールのようだった。

あのうわさが、またささやかれ始めた。みんなは、だんだん森川君を仲間外れにするようになった。「おはよう。」

ある朝、森川君が元氣よく教室に入ってきて、石山君たちに声をかけた。すると、今まで話をしていなかった石山君たちは話をやめ、プイツと横を向いてしまった。

いつも明るかった森川君も、だんだん無口になっていった。

ぼくはこまってしまった。あのとき、石山君たちの話に対して、「それはちがう。」とはっきり言えば、うわさは広がらなかったかもしれないのだ。今は、もう言い出せない。ぼくは、気が弱い自分を責めた。でも、心のすみには、(早く三学期が終わればいいな。)という、ずるい気持ちもあった。

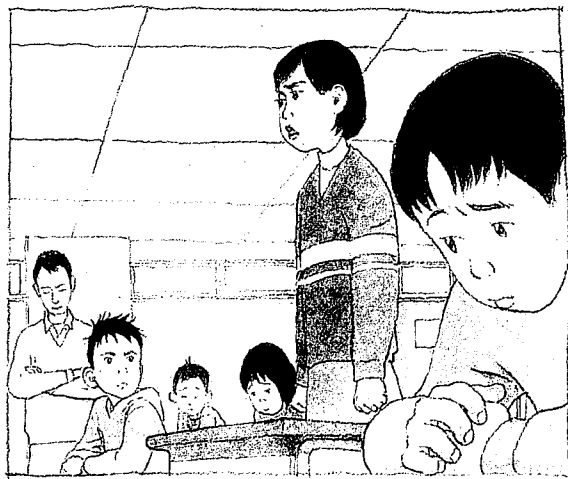
そんなある日の帰りの会で、いつもはおとなしい順子さんが、めずらしく手を挙げて、森川君のことを話し始めた。

「わたしの家は、森川君の家の近くです。わたしは、森川君が、休みの日に庭で何か作っているのを、よく見かけました。森川君は器用なんです。」

自分が発言しているわけでもないのに、ぼくは、真っ赤になった。ずるかった自分がはずかしかった。

順子さんはりっぱだと思った。

「本立てだって、オルゴールだって、わたしは、森川君が一人で作ったのだと思います。先生は、『ど



んなことでも、確かめずにうのみにしてはいけません。』とよくおっしゃいます。それは、『うわさで人を判断してはいけません。』ということにも通じると思います。確かめもしないで、森川君を仲間外れにするなんて……。」

順子さんの落ち着いた声を聞きながら、ぼくは、森川君の気持ちを想像した。そして、順子さんの発言が終わったら、ぼくも発言しなくてはいけない、と思った。

森川君が無口になっていったのを見て、「ぼくはどんなことを考えたのだろう。」

「ぼくも発言しなくてはいけない」と思ったのは、どうしてかな。

仲間外れのないクラスにするためには、どんな心が大切かな。

仲間外れのないクラスにするために、どんなことを心がけたり実行したりすればよいか、話し合ってみよう。